

ご 挨 拶

竹 西 寛 子

この度、早稲田大学芸術功労者として表彰されることになった。もとより過分のお扱いである。まことに、まことに思いがけない、有難い、しかし面映ゆくもあるお扱いで戸惑いは消えないけれども、両親を初めとして、私を今日まで陰に陽に養い育て、優しさと温かさで見限ることなく支えて下さった先達、友人、知己への感謝をこめてこのご褒美をいただこうと思う。

その上、この表彰を記念して、早稲田大学図書館で竹西寛子展まで催して下さるという。二十代の前半、自分が最後に学んだ大学でこのような温情を受ける私は何という果報者であろうか。被爆地である広島を離れてから半世紀が過ぎている。言葉で生きる人間の明暗を意識するようになったのは随分遅かった。そういう私が恩恵を蒙った図書館は多々あるのに、外壁にまだ鳶の這っていた早大図書館に今なお格別の気持でつながっているのは、生きてきた時代のせいもあるであろう。

早大に入りたいと願っていた頃の私は、戦時中の不勉強を何とか補わなければならないと思い続けていた。このままではいけない。やっと入学がかなってからは、果してこの人達についてゆけるのかと、同級の誰彼を見上げていた。教室にいたよりも図書館にいた時間のほうが長かったと思う。遊ぶ場所を知らないし、経済も寒かったので、この大学にいる間に一冊でも多くの本を読んで不勉強を補いたいと思った。

ギリシアの喜劇を翻訳で初めて読んだのも、サッフォーの抒情詩を知ったのもここだった。雨の日のシャンデリアのうるんだような明り、秋の夕暮にしのび寄る冷氣の中での一喜一憂が、自分の心のひもじさと結びついて、今にして思えば、心の揺れの何ともはげしい時代ではあった。威張って差し出せる展示物は一つもない。ただ、生きてきた年月から目を背けないよう自分を叱っている。大方のご寛恕をお願い申し上げる次第である。 (三月三日)

竹西寛子略歴

- 一九二九年（昭四） 広島市生。家業は醸造業。
一九三六年（昭一一） 広島偕行社附属済美学校に入学。
一九四二年（昭一七） 広島県立広島第一高等女学校に入学。太平洋戦争末期は学徒動員により被服支廠、東洋工業などに働く。
一九四五年（昭二〇） 広島市に原子爆弾投下される。
一九四六年（昭二一） 広島県立広島女子専門学校国語科に入学。町は大部分廃墟のまま。
一九四九年（昭二四） 広島女専卒業。
一九五〇年（昭二五） 新学制の早稲田大学第一文学部文学科（国文学）三年に編入学。
一九五二年（昭二七） 同校卒業。河出書房に入社。主に日本文学関係の編集に従う。
一九五七年（昭三二） 同社倒産。筑摩書房に入社。現代及び古典日本文学の編集に従う。本居宣長の著作に驚く。六二年末退社。
一九六三年（昭三八） 長編評論「往還の記－日本の古典に想う」を、丹羽文雄主宰「文学者」に連載。初めての小説「儀式」を「文芸」に発表。
一九六四年（昭三九） 「往還の記」により第四回田村俊子賞受賞。
一九六九年（昭四四） 早稲田大学教育学部講師、王朝作家作品研究担当二七年間。
一九七三年（昭四八） 評論「式子内親王・永福門院」により第一回平林たい子賞受賞。
一九七六年（昭五一） 小説集「鶴」により第二六回芸術選奨文部大臣新人賞受賞。教科用図書検定調査審議会委員（一〇年間）。
一九七八年（昭五三） 小説「管弦祭」により第一七回女流文学賞受賞。
一九七九年（昭五四） より随想「耳目抄」を「ユリイカ」に連載、現在に及ぶ。
一九八一年（昭五六） 小説「兵隊宿」により第八回川端康成文学賞受賞。
一九八六年（昭六一） 評論「山川登美子－『明星』の歌人」により第二七回毎日芸術賞受賞。
一九九四年（平六） 作家・評論家としての業績により日本芸術院賞受賞。同年、日本芸術院会員に選ばれる。
二〇〇一年（平一三） 早稲田大学芸術功労者として表彰される

この間に、文化功労者選考審査会委員、川端康成文学賞ほか、文学賞、コンクール等の選考審査を務める。現在日本文芸家協会理事、日本近代文学館理事、日中文化交流協会常任理事。

**早稲田大学芸術功労者受賞記念 竹西寛子展
出陳目録**

この目録は、出陳された資料の一部を目録にしたものです。
※印のついた資料は個人蔵です。

<自筆資料>

※「花にわかれぬはるはなし」額装

1995 年 12 月

日中婦人書道交流展（北京）出品

※「芭蕉の不易流行説」原稿

広島県立広島女子専門学校国語科卒業論文

1949 年 1 月 自装紐綴

※「本歌取のすすめ（『日本文学論』より）」原稿

『群像』1993 年 1 月

※「草原の歌（『長城の風』より）」原稿

『新潮』1994 年 1 月

※「自由の涼しさ一字野千代氏を悼む一」原稿

『朝日新聞』1996 年 6 月 12 日夕刊

「暮れない空（『山河との日々』より）」浄書原稿

『新潮』1998 年 9 月

<著作>

往還の記 日本の古典に思う

筑摩書房 1964 年 9 月 装幀・栃折久美子

第 4 回田村俊子賞

源氏物語論

筑摩書房 1967 年 3 月 装幀・栃折久美子

儀式

新潮社 1969 年 8 月 装幀・岡本半三

※**人と軌跡 9 人の女性に聴く**

中央公論社 1970 年 4 月

式子内親王・永福門院 日本詩人選 14

筑摩書房 1972 年 7 月

第 1 回平林たい子文学賞

ものに逢える日

新潮社 1974 年 2 月

紀貫之 土佐日記 日本の旅人 2

淡交社 1974 年 7 月 装本・田中一光

鶴

新潮社 1975 年 6 月 装幀・富岡惣一郎
第 26 回芸術選奨文部大臣新人賞

古典日記

中央公論社 1975 年 6 月 装幀・熊谷博人

現代の文章

筑摩書房 1976 年 6 月 装幀・吉岡実

青葉の時へ

新潮社 1977 年 2 月

管絃祭

新潮社 1978 年 7 月 装画・近藤弘明
第 17 回女流文学賞

月次抄

青土社 1978 年 10 月 装幀・奥野玲子

歌の王朝

読売新聞社 1979 年 6 月 装幀・栃折久美子

愛するという言葉

新潮社 1980 年 1 月 装画・難波淳郎

古語に聞く

講談社 1981 年 5 月 装幀・志賀紀子

兵隊宿

講談社 1982 年 6 月 装幀・志賀紀子
第 8 回川端康成賞

※ひとつとや

毎日新聞社 1983 年 3 月 装幀・安野光雅

時のかたみ

新潮社 1984 年 3 月 装画・難波淳郎

※続ひとつとや

毎日新聞社 1984 年 5 月 装幀・安野光雅

読書の歳月

筑摩書房 1985 年 6 月 装幀・吉岡実

道づれのない旅

彩古書房 1985 年 7 月

空に立つ波 竹西寛子の古今集

平凡社 1985 年 9 月 装幀・菊地信義

山川登美子 「明星」の歌人

講談社 1985 年 10 月 装幀・志賀紀子
第 27 回毎日芸術賞

※句歌春秋

新潮社 1987 年 1 月 装画・加山又造

湖 竹西寛子自選短篇集

学芸書林 1989 年 5 月
装画・生井巖 装幀・中島かほる

丘の上の煙

青土社 1990 年 8 月 装幀・奥野玲子

水の断章

淡交社 1991 年 3 月

朝の公園

読売新聞社 1991 年 4 月
装画・生井巖 装幀・中島かほる

挨拶

福武書店 1992 年 1 月 装幀・田村義也

古今和歌集 古典を読む 28

岩波書店 1993 年 3 月 装幀・奥野玲子

太宰府の秋

青土社 1993 年 11 月 装幀・奥野玲子

長城の風

新潮社 1994 年 6 月
装画挿絵・平山郁夫 装幀・新潮社装幀室

国語の時間

読売新聞社 1994 年 8 月 2 刷
装画,装幀・粟屋充

※わが文学の原風景 作家は語る

小学館 1994 年 10 月
聞き手・新船海三郎

詞華断章

朝日新聞社 1994 年 12 月
装画・石踊達哉 装幀・中島かほる

竹西寛子著作集 第 1～5 巻・別冊

新潮社 1996 年 6 月 装幀・新潮社装幀室

※海からの風

青土社 1997 年 12 月

山河との日々

新潮社 1998 年 10 月

文学私記

青土社 2000 年 2 月

<初出雑誌>

『往還の記』 第 4 回田村俊子賞

「文学者」1963 年 7 月号～1964 年 3 月号

『儀式』

「文芸」1963 年 12 月号

『鶴』 第 26 回芸術選奨文部大臣新人賞

「新潮」1972 年新年特大号

『管絃祭』 第 17 回女流文学賞

「波」1977 年 4 月号～1978 年 4 月号

『兵隊宿』 第 8 回川端康成文学賞

「海」1980 年 3 月特別号

以上